

# 幸せは不幸を連れてやってくる

川嶋一洋・作

## 第1章

ばあん!!

「やったあ! これで誰にはばかることなく冬休みよう!」

終業式のホームルームが終わった瞬間、軽井沢美琴は力一杯机を叩いた。

その勢いで艶やかなロングヘアが揺れ、少し上気した白いほおを何度も撫でる。

「あー、この開放感を感じるたび、私は学生なんだなって思うのよねえ」

ぐるんと頭を回し、美琴は帰り支度を始めたクラスメイトたちを見た。みんな様にうきうきしながら、雑談に花を咲かせている。

そんな美琴の視線に気づき、親友のミチルが近づいてきた。

「ミコやん、どう? マクドでも行かへん?」

かなり関東のイントネーションが混じった関西弁で、ミチルが話しかけてくる。

三つ編みに分厚いメガネという出で立ちは、美琴がイメージしている関西人に近い。あと手にそろばんを持っていれば完璧だと、ミチルの転入時の挨拶で思ったことを思い出した。

「関西弁は関西人の心。関西人の魂は売らへん! ウチは関西人や!」

そう宣言していたが、転入して2年近くが過ぎ、かなり売り飛ばしているようだ。

不思議とミチルと美琴は波長が合い、彼女が転入してきてすぐに2人は友達になった。美琴にとってミチルは、居心地のいい雰囲気を与えてくれる希有な存在だった。

「悪いけど、今日はうちの神社で、バイトのギャラアップ交渉をするの」

「ああ、そっか。そろそろ巫女さんのシーズンやったねえ。忘れてたわ」

「……とっておきの情報を貰ったから、1食おごりたいんだけどね」

髪を指ですきながら、美琴は首を振った。

「……なんや。とっておきの情報やのに、マクドで手打つ気やったんかいな」

「ホントの情報で、ホントに上手く言ったら、好きなだけ食べさせて上げるわよ。……食べ放題の店だったらだけど」

「ケチくさあ。もしかしたら一生が変わるかもしれん情報やでえ?」

鞆を手に持ち、ミチルはこれ見よがしにため息をついた。

「ま、ええわ。はよミコやんの家に行こうや。ウチにも関係あることやさかい」

人差し指でメガネをいじるミチル。レンズが光をきらりと反射する。

「ミチル、今年もあたしんちのバイト、手伝ってくれるんだ!」

「もちろんや。また一緒に巫女さんになって、霊験あらたかに年を越そうや」

「よろしくっ! ……ホントは、春也君と一緒に年を超したいんだけどなあ」

そういつた途端、自分の大胆な発言に、美琴の顔が紅くなる。

鏡野春也。野球部を甲子園に導いた、エースで4番。そして学園で1番の美形。

「そりゃ、ミコやんちじゃ無理やろ。かき入れ時やし。ていうかそれ以前に、まだ告ってへんのやろ?」

「……う、うん。だつて、まだ、あの情報を生かすタイミングが……」

告白どころか、美琴は憧れているだけで、話したことすらなかった。美琴にとつ

て春也は、遙か上空を突き抜けて成層圏に達するぐらい、雲の上の存在だった。

「なら、そんな話より、今はゼ二の話や! ほな、いこか」

「もー、1分くらい夢を見させてくれてもいいじゃない」

ふくりとほおをふくらませ、美琴は唇をとがらせた。

「何いうてんねん! 時は金なり、や。1分でも無駄にしたらあかんで!」

「じゃあ、せめて30秒お……うわあつっ!」

ミチルに腕を取られ、美琴は全速力で三笠学園を後にした。

■ ■

いつもの通学路を駆け抜け、いつきに裏山へと続く路地へと向かう。

紅葉の名残を残した木々が美琴とミチルを出迎え、枯れ散った葉が2人に踏みしめられて悲鳴を上げる。

2人の吐く息が白い軌跡を残し、そして消えていく。

「ちよ、ちよつと……ま、まって……」

美琴の肺が破裂する寸前、2人は目的地に到着した。

あけぼの神社。美琴の祖父が宮司を務める由緒正しい(らしい)神社。古ぼけたという言葉のほうが似合いそうな、色あせた雰囲気を持っている。

「はあつ、はあつ……」

美琴は鳥居に背を預け、大きく肩を上下させて息を整えようと努力した。

「なんや、ミコやん、ずいぶん弱やなあ」

「み、ミチルが頑丈すぎるのよう。な、なんであれだけ……全速で走って、息切れしない……のよっ」

「お金がからんときは、ウチは無敵やねん(笑)」

歯を見せてにっこり笑い、ミチルは親指を立てた。

「ああ、そうだったわね……忘れてたわ。さんざんひどい目に遭ったつてのに」

「ひどい言いぐさやなあ。色々見え目にも遭わせたつたのに」

「どこがよ……」

大きくため息をつき、走馬燈のようにグルグル脳裏を走り抜ける悪夢の群れを追い払う美琴。たった二年のつきあいなのに、数年分の苦勞をかけられたような気がする。

「でもまあ、ミチルがくれたあの情報には感謝しないとね。上手くいったら、今までのこと、ゼーんぶチャラにしてあげる」

「あの情報つて、何やつけ？」

「んもう。……春也君の好きな物情報のことよ」

ほおを赤らめ、美琴が目伏せる。

「ああ、せやつたなあ。マクド1回でチャラになるような重大情報を提供したんやつた。すっかり忘れとつたわ」

やれやれと肩をすくめ、ミチルは美琴の隣に並ぶように背を鳥居に預けた。

「野球部のエースで4番！ 美琴のあこがれの人が実は巫女が好き！ なあんて情報……ハンバーガー1個の価値しかないもんなあ」

「そ、そんなことないよ。そんなことないつて……」

慌てて、手をバタバタ振る美琴。背中を預けた鳥居が、ミシミシといやな音を立てる。

「おい、そんなところにもたれるんじゃない！ 折れるぞい！」

突然響いた怒声に、ミチルは慌てて背を離れた。

「ひええ！ つて、あれ？ 校長センセやんか？」

「ここでは宮司じゃ」

白髪の老人が、少し不満げにヒゲをつまんでみせる。

「じいちゃん……」

「美琴まで、なんじゃ！ ここでは宮司じゃと言うとるじゃろうに！」

女子高生のように唇をとがらせ、軽井沢達彦はふいっと顔を背けた。

「それはちょうど良かった。実は私、宮司のじいちゃんに用があるのよ」

「用事とは何じゃ？」

「アルバイト代のアップと、この敷地外への巫女装束での外出許可！」

「却下じゃ！」

すばあんと、達彦は切って捨てた。

「お前等、それどころじゃないぞい」

「お前等つて……ウチも？」

ミチルが、慌てて自分を指さす。

「そうじゃ、2人揃って赤点2つ。このままじゃと累積警告でレッドカードじゃ。ま、おとなしく休み中補習じゃな」

達彦は黄色いカード4枚と、紅いカードを2枚取り出した。

それは、ワールドカップでサッカーファンになった達彦が校則に導入した、ミーハーな落第システム用カードだった。1学期に2枚黄色い落第警告カードを受けると、通年で3枚の警告を受けるとレッドカードを受けると生徒は、補習で埋め合わせをしないと退場（落第）になる。

わかりやすく受けは良いが、受け取る生徒が憂鬱になることに変わりはない。

「えーっ！ だまし討ちだよ！ もう！ 今は宮司じゃなかったの!？」

「カードを出すときは、校長にきまつとるだろうが。宮司が、学校の成績を話すわけにはいかんじやろ。TPOをわきまえんとは、我が孫ながら情けない」

宮司から校長に戻つても、達彦は唇はとがらせたままだった。

「じいちゃん、休み中補習つてことは……巫女のバイトは？」

「このままじゃと、無理じゃなあ。ワシもオマエの巫女装束は見たいんじゃない」

「そ、そんなの困る！」

「困ると言われてもなあ。ああ、ああ、見たかったのう」

ドゲシッ!!

「こ、この姑息ジジイっ!! 交換条件があるんでしょ!? さつさと言いなさいよう！」

「人を足蹴にしつつ交渉とは、我が孫ながら容赦がないのう。小さいころはあんなに可愛かつたののう。小さいころはおしめを替えて……」

ドゲシッ!! ドゲシッ!! も一つ、ドゲシッ!!

くつきりと顔に足跡を刻み込まれた達彦が、ピヨリながら腰を着いた。

「肉親でなかつたら、穴を掘って埋めるところよ！」

「……半分ぐらい棺桶に脚を突つ込まされた気がするのう」

「半分で済ませたんだから、感謝してよね」

美琴はふいっと顔を背け、……鳥居の陰に隠れたミチルに目をやった。

「あ、相変わらずやなあ……」

「いつものことよ」

「でも、交換条件を聞く前に蹴つてよかったんか？」

「だあいじようぶ。交換条件を出さなかつたら、もう半分も棺桶に入れてあげるだ

けだから」

腕を組み、バンバンバンと地面を踏みしめる美琴。目がキラリとやばげに輝いている。……達彦は大きく息を吐いた。

「仕方ないのう。オマエの白いパンツに免じて教えてやろうかのう」

「あーっ！」

美琴は、慌ててスカートを押さえた。スカート履いて相手の顔を足蹴にすれば、当然の帰結だった。

「とりあえず、巫女の修行に励んで貰おうかのう。……ミチルには、別な仕事を頼もうかの。思いついたら電話するぞい」

「ウチもオーケーなん!？」

「おおとも。年越しと正月に主力巫女が2人抜けるのは致命的じゃからな」

親指を立てた達彦の手を、ミチルは両手で掴んだ。

「おおきに！ 今年の年越しは特別やから……勉強で終わらせたくなかつたんや」

「ミチルう、特別ってどういうこと？ 何かあるの?」

「あ、いや、何でもないんや。……たいしたことやないさかい」

少し黙り込んだ後、ミチルは急に元気になり、鞆を小脇に抱えてくるりと回った。

「ほな、ウチは家に戻るんで、連絡まっとりします〜！ ほんじゃ、ミコやん、まったね〜」

びしっと敬礼すると、ミチルはいそいそと立ち去っていった。

「なんだか、エセ関西人度がアップしとるのう」

「ゲシッ！」

「……エセでもなんでもいいでしょ！ ミチルはミチルなんだから。あたしの友達を悪く言わないで頂戴！」

「あいたたた……オマエがそう言うならワシもかまわん」

「なんであたしが言ったらいいのよ」

「なんとなくじゃ」

ケリで歪んだ顔を指でグニヤグニヤと修正しつつ、達彦は言い切った。

「それはともかく、交換条件は分かかっておるようじゃの?」

「巫女としての修行をすればいいんでしょ。まったく、なんだかんだと理由を付けて修行させようとするの、やめてよね」

「巫女ではない、破魔巫女じゃ！」

「語呂が悪いから、嫌いなもの！」

「語呂が悪いから、嫌いなもの！」

達彦と顔をつきあわせながら、美琴ははつきり宣言した。

「何を言うか！ 我が軽井沢家は代々退魔業を営んでおるんじゃ！」

「だからって、あたしがそれをつぐ必要はないじゃない！」

「何を言うか！ オマエがウチで一番素養を持つておるんじゃ！ そろそろオマエにも覚醒して貰わないと困るんじゃ」

何故か胸を張り、達彦が言う。

「いやよっ！ 世襲制反対〜〜〜！」

「そんなことを言っているのか？ 巫女装束でなければ、春也君にアピール出来んのではないか?」

「それはそうだけ……って、どうして知ってるのよ！」

「式神は便利じゃぞ?」

達彦は、鳥の姿の式神を符に戻した。

「あーっ！ デバガメすんなってあれほど言ったのにいつ！」

ドゲシッ!! ドゲシッ!! も一つ、ドゲシッ!! さらにドゲシッ!!

ゴミクスのように地面に倒れる達彦を無視し、美琴は神社の更衣室に向かった。

## 第2章

すると制服を脱ぎ捨て、美琴は下着姿になった。

そして自然な動作で、透き通る雪のような白さをたたえた肢体に、巫女装束を纏っていく。

ばざりと髪を振り払った瞬間、美琴は巫女になった。

「ふうう。あたしはこの衣装を着られるだけでいいんだけどなあ。春也君、巫女が好きっていう話だから……」

手に持った玉串を柵に戻し、部屋の片隅に飾ってあるバットを手に持った。春也君オークションに参加した時に、貯めていたお年玉をはたいて買ったものだ。

「修行はイヤだけど、巫女装束を着れないんじゃ仕方ないもんねえ。名前も憶えて貰えてもらえないあたしにとつて、これが最高の切り札なんかもん」

パンパンと手をはたき、バットの真ん中をを肩にのせて更衣室を出る美琴。

目の前に……達彦の顔があった。

「お、おう、遅いから何があつたかと思つたぞい」

「デバガメはやめろつって言つたでしょおおおがつつ!!」

「バコオオオッ！」

美琴のバットが火を噴き、達彦は一〇分ほど『お星様』になった。

「バコオオオッ！」

美琴のバットが火を噴き、達彦は一〇分ほど『お星様』になった。

「バコオオオッ！」

美琴のバットが火を噴き、達彦は一〇分ほど『お星様』になった。

「まったく、油断も隙もありやしないわよ」

溜まったうっぷんを払おうと、美琴は日が落ちて暗くなった境内でぶんぶんとしてバットを振った。

「えーいつ！ピッチャー振りかぶって、達彦を投げましたあ！バッター美琴、強烈なスウィング！その頭を捕らえて、ホームラン！」

かけ声と共に、ブンブンとバットを振り続けた。  
……30分経過。一個大隊ほどの達彦の頭を妄想内で砕き、美琴は境内にすんと腰を下ろした。

「ふーっ！あー、すっきりしたあ！」

んーっ、と背を伸ばし、額に浮かんだ汗をぬぐう。  
パチパチパチ、と鳥居の方から拍手が聞こえてきた。

「だ、誰？」

「いや……野球に興味がある巫女さんがいるなんて、思ってもいなかったよ」  
近づいてくる足音に対し、美琴はバットを持って見構えた。

「おいおい、バットはそういうコトに使うものじゃないよ？」

月明かりが男を照らす。野球部のユニフォームと帽子、そして流れるような髪が現れた。

「春也先輩！」

「名前、憶えてくれていたんだ」

「あ、あたりまえです！……我が校で先輩の名前を知らない人はいません……」

「うれしいね、美琴君」

どきーん！

美琴の鼓動が、一気に加速し始める。

「どっ、どっ、どうして……あたしの名前を！」

「前に勝利祈願で来たときに、君のことを知ったんだ。話しかける機会はなかったけど、ずっと君を見ていたんだよ」

「う、うそ……」

顔が真っ赤になっているのが、美琴本人にもはっきりと分かる。

顔が熱く震えて、美琴の頭から湯気が上がる。

「あ、あたしも見てました……」

「それは嬉しいな。隣、座ってもいいかな？」

「ど、ど、どどどどど、どうぞっ」

「それではお言葉に甘えまして」

春也はごく自然に、まるで普段からしているようにすんなりと、美琴の隣に腰を下ろす。だが、それを見ている美琴は、自然とは180度反対の方向の心境だった。

「あ、あ、あたしを見ていたのは……あたしが巫女だからですか？」

「逆だよ。ずっと君を見ていたせいで、巫女フェチだって思われてしまったんだ」  
ドキン！ドキン！

心臓が爆発しそうになり、美琴はぎゅうっと胸元を握りしめる。

「あ、あ、あたしのせいですか？ご、ごめんなさい……でも、う、うれしいにや」  
胸がドキドキして、ろれつが回らない。美琴は、春也の顔を見ることが出来ず、

無意識のうちに巫女装束の縫い目を何度もひつかいた。

「どんなことだって、君に嬉しいといつて貰えたら、僕も嬉しいよ」

春也はすうっと手を伸ばし、美琴のあごに指を当てて持ち上げた。そして、くいつと美琴の顔を自分の顔のそばに近づける。

春也と美琴の唇の距離は、数センチにまで近づいた。

「せ、せせせ、先輩？」

「なんだい？美琴君」

「ち、ち、ちち……近づきすぎです！」

「いやなのかい？」

じつと春也に見つめられ、美琴の顔が真っ赤に染まる。

「い、いやじゃないです……」

「じゃ、目、閉じてくれる？」

「ひええ……は、ははは……はい」

心臓が破裂しそうなほど、胸が高まる。

それがどういう意味なのか、美琴にも分かる。

初めてのキスは春也と……そんな想像をしたことはあるけれど、それが現実になると思ってもいなかった。こんな幸運が自分に訪れるなんてこと。  
ゆっくりと瞳を閉じる美琴。彼女の唇に温かい圧力が掛かる。

唇から伝わる体温、ほんのかすかに流れてはおおくすぐる春也の息。ふさふさとしたヒゲ。

……ヒゲ！

慌てて目を開けた美琴の前には『龍』だった。

「さすがは破魔巫女。唇だけで幻影の術を……」

ぐわしゃっ！

美琴のバットが火を噴いた。



「さ、最後まで言わせ……」

ぐわしやつ！ ぐしやあつ！

「うるさいッ！ うるさいッッ！！」

ぐわしやつ！ ぐしやあつ！

「乙女の純潔を奪った罰よお！ 踏んでやる、踏んでやるッ！ 原型とどめないぐらい踏んでやるうううう！」

「うわ、わわ、お助けッッッ！」

血相を変えて、竜が逃げ出す。

「逃がすかあつっ！」

殺意をあらわにした美琴が、血まみれバットを持って追いかける。

「ひやああああッッッ！」

涙を流しながら竜が舞い上がる。

「だから逃すかあつっ！ あんたを倒すためなら、あたしは鬼でも悪魔でも巫女でも、なんでもなつてやるう！」

空気の渦を足がかりに、美琴が空を駆ける。

怒りのあまり、髪がバタバタとはためく。

サファイアをくぐり抜けた日差しのような碧をまとい、手に血まみれのバットを  
持った巫女が空を駆ける。

「は、早すぎる……」

悲鳴を上げながら竜が逃げる。

破魔巫女としての覚醒波動が、周囲の木々の残り葉を粉々に砕いていく。

「待ちやがれえっっ！！ このクソ竜があつっ！」

ビルの外壁を駆け抜け、一気に竜に迫る。

「うわ、うわ、うわわわ……美琴……」

「なれなれしく名前を呼ぶなケダモノがあつっ！！」

パコオオン！

電光石火の一撃が竜の体を捕らえ、バランスを崩した化け物は地面へ墜落した。

家を吹き飛ばし、道を転がり、壁にぶつかってようやく止まる。

「ぐはあつっ！ ひでえ……」

壁の破片を押しつけて竜が出てきたとき、真っ先に目に入ったのは巫女装束の白足袋だった。

「よく生きていてくれたわねえ。あれくらいで死んで貰っちゃ困るのよねえええ」

ギラリと瞳を輝かせ、バットを握りしめる美琴。

「お姉さんが、生まれてきたことを後悔させてあげるわっっっ！」

「いや……だから……ちよつと話を……」

「問答無用おおお!!」

バットが勢いよく振り下ろされ、街に小一時間ほど何かを殴る音が響き続けた……。

### 第3章

ずるずる……。

ミンチ状になった物体が、神社へと続く階段を必死に上っていた。シユワシユワと湯気を上げながら、ゆつくりと、ゆつくりと。

そして鳥居のたもとで止まり、1つの固まりへと変化し始めた。

「うわ、まだ頭がクラクラしとる……。何回殺されたかわからんわ」

肉塊は糸まとわぬ少女の姿になった。

「うー、寒ウ……」

慌てて残りの肉塊から作った制服を纏い、大きく息を吐く。

「ミチル、ご苦労様じゃったな。成長過程の子供龍とはいえ、聖龍をミンチに変えるとは、我が孫ながら、先が楽しみじゃわい」

「校長センセ、いくらレッドカードと相殺やいうても、あの仕事はハードすぎたわ。

ミコやんのファーストキスをいただいてもうたし……」

べたりと地面に腰を下ろし、ミチルは額の汗をぬぐった。

「ウチはミコやんの力になれたから嬉しいけど、もつとやりようがあつたと思うんやけどなあ」

「そうかのう」

「あんな変化球みたいな曲がりくねつたやりかたやなくて、もつと直球ストレートにズバアンと修行させればよかったやん。ミコやんのことや、ちゃんとエサを用意すれば、喜んで修行するで？」

メガネを直しながら、ミチルが首を傾げた。

「ま、ウチは……この世界から去る前にミコやんの力になれて幸せやったけど」

鳥居に背中を預け、星を見上げるミチル。さばさばとした表情に、寂しさが混じる。

「来年の一日が人間界の滞在期間リミットやから……いい思い出が出来たわ」

「何を言つとるんじや？」

「何って……神界の者が人間界にいられるのは2年間って決まりが……」

「そうじゃな。聖約を交わしていないものは、のう」

ヒゲをいじりながら、達彦は言った。

「聖約。それは死が2人を分かたずまで途切れない、聖獣と人が結ぶ絆の証。聖なる約束は、聖獣にとつて命よりも価値があるものだ。」

「だからウチは……」

「ミチルよ。破魔巫女と聖獣の聖約条件を知っておるか？」

「……ほへ？」

首を傾げるミチル。

「聖約はのう、聖なる接吻。心を許した初めての口づけなのじゃ。心と体の両方を許した証が必要なのじゃよ」

「……ほへ？」

ミチルは思わず、自分の唇に指を当てた。

「聖約は、心を許した初めての口づけ……」

「……ひへ？」

ミチルは息をのみ、そして……状況を理解した。

「へ、変化球を投げられたの、ミコやんだけやなくてウチもやったんかっつっ！」

「そうじゃ。そうでもせんと、聖約を結べんじやる？」

あつげらんとした顔で、達彦は断言した。

「確かにウチとミコやんはそんなエッチい関係やなかったけど……で、でも、それならウチやなくても……。次の聖獣でも……」

「そうもいかんのじゃ。聖約の接吻は初めてでなくてはならんのじゃが、放っておくと春也君のところまで夜這いしてでも唇を奪いかねんやつじゃからなあ」

ミチルの脳裏に、天井裏をほふく前進する美琴の姿が浮かんだ。妙にリアルに。

「ひ、否定できへん。……友達がいのないウチを許してなミコやん」

「ま、というわけじゃ。もはやオマエは美琴と聖約を交わした身。オマエは帰らなくっていいんじや。これからも美琴の力になつてくれい」

「ホンマに!？」

ぐっと達彦の手を握るミチルの瞳に、うつすらと涙が浮かんでいる。

「おおきに……。ウチ、友達になれたミコやんと離れたくなかつたんや」

「そうか。よかつたのう」

「おおきに！ おおきに！ ウチ、幸せやあ〜」

ぶんぶんと手を上下に振った後、あることに気づいてミチルの動きが止まった。

「あの……校長センセ、ちょっと聞きたいことがあるんやけど……」

「ここでは宮司じゃ」

「どっちでもええねん。……なあ、ウチと聖約を交わしたつてミコやんが知るとき

には、ウチの正体がバレる……つまりファーストキスを奪ったのがウチやつてバレるんちゃうん!？」

「ああ、ばればれじゃ。超バレバレ。女子高生風に言うとならばバレてやつ？」

さ〜〜と、ミチルの顔から血の気が引いた。

「うそお！ そんなことになったら、百万回殺されてまうやんか〜」

「そのときは、百万一回生き返れ」

「そんなあ、何とかしてえな！ 校長センセ!!」

「先生は生徒間のコトには口をださんのじゃ」

「そんな、殺生なあつっつ!!」

ミチルの絶叫が、静まりかえった夜の森に響いた。

何度も何度も、何度も響いた……

2人が仲直りして、美琴が世のため人のため、そしてなにより自分のために闘うようになるのは、遠いようで近い未来の話である……

(終わり)

#### 川嶋一洋

老若男女、揺りかごから墓場まで、あるいはファンタジーから政治劇まで。広く浅くが取り柄？ 作家ですと胸を張っているような実績が出来るのはいつの日か。スーパードアッシュ文庫から出させてもらった『帰宅部！ HOME』が代表作。

初めての方は初めまして。川嶋です。

前回は捻りすぎたので、今回はおとなしくオーソドックスにと思ったはずなのに……気が付くと大変なことに。

続きそうな終わり方ですが、書く予定は全くなかったり。